花巻市博物館だより

HANAMAKI CITY MUSEUM

No.72

2024.4

花巻市博物館HP

Facebook

Instagram

目次

▶P1開館20周年　▶P2-3年間行事予定、講座・体験学習メニュー　▶P4-5テーマ展「多田等観」
▶P6活動レポート　▶P7館長コラム・インフォメーション　▶P8花博コレクション

花巻市博物館は花巻地方の歴史・文化に関する資料を収集・調査・研究・保管し、展示しています。故郷の特色ある伝統文化を継承しながら、親しみ理解する生涯学習の場として、平成16年４月24日に開館し、今年開館20周年を迎えます。

様々な展覧会や各種講座、体験学習を通して、昨年度までに約47万人を超える多くの方にお越しいただきました。

花巻の風土と歴史をたどる展示が、豊かな人間性をさらに発展させる一助となれるよう、これからも創意工夫を重ねてまいります。

令和６年度 展示案内

●テーマ展「花博コレクション」「斎藤宗次郎展」

期間：開催中～５月６日(月・振)

花巻市博物館が誇るコレクションから、学芸員が厳選した魅力あふれる資料を紹介します。

また、斎藤宗次郎の明治31年の日記の記事と関連する資料を紹介します。

●テーマ展「多田等観 ― 遥かなるチベット ―」

期間：５月25日㈯～７月７日㈰

仏頂尊勝母

高名なチベット仏教研究者である多田等観が現地から持ち帰った仏像や仏画、花巻との心温まる交流を示す資料など紹介します。

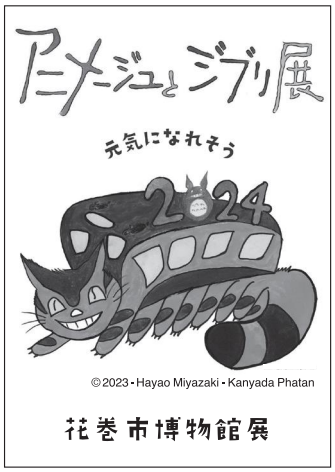
★関連事業

・ギャラリートーク

●特別展「アニメージュとジブリ展」花巻市博物館展

期間：７月20日㈯～９月23日(月・振)

雑誌「アニメージュ」が多くのアニメ作品の誕生と発展に果たした役割を豊富な誌面展示と貴重な制作資料とで振り返り、「アニメージュ」を作った人たちが同じ精神でスタジオジブリを立ち上げ、現在まで作品を送り届けている日本のアニメ文化を紹介します。



●特別展「縄文ワールド ― 写真家・小川忠博の世界 ―」

期間：10月19日㈯～令和７年１月13日(月・祝)

山形土偶（花巻市稲荷神社遺跡）
花巻市総合文化財センター所蔵　撮影：小川忠博

写真家 小川忠博氏（1942－）は、数々の縄文写真を40年近く撮り続けてきました。

本展では、これまでに全国各地で撮影してきた縄文写真のコレクションの中から、厳選した写真と岩手県内出土の実物資料を併せて紹介します。

★関連事業

・10月19日㈯ＳＰギャラリートーク

・11月３日(日・祝)記念講演会

●テーマ展「収蔵資料展」

期間：令和７年２月８日㈯～４月６日㈰

花巻市博物館の収蔵品の中から、厳選した資料を紹介します。

★関連事業

・ギャラリートーク

花巻人形　仁田四郎忠常

※展覧会の詳細はＨＰでもお知らせいたします。

令和６年度　講座・ワークショップメニュー

博物館では、花巻の歴史や文化をより詳しく、そして楽しく学んでもらうために、講座やワークショップを行っています。令和６年度も様々なメニューを用意しましたので、ぜひご参加ください。

《講　座》

◎館長講座
第１回　　６月２３日(日)
第２回　１０月２７日(日)
第３回　　２月２３日(日・祝)

◎学芸員講座
第１回　　６月　９日(日)
第２回　１２月１５日(日)
第３回　　３月１５日(土)

◎古文書講座
第１回　　６月１６日(日)
第２回　１０月１３日(日)
第３回　１１月　９日(土)

★各講座聴講無料、要申込
★詳しい内容はＨＰ、ＳＮＳ等でお知らせします

《ワークショップ》

◆勾玉つくり
日にち：５月３日(金・祝)
内　容：滑石を削って、磨いて、古代のアクセサリー「勾玉」をつくります。
材料費：340円
定　員：20名　要申込

◆縄文弓矢・火起こし体験
日にち：５月５日(日･祝)
内　容：弓矢を使った的当てと、木を使った火起こしに挑戦します。
材料費：無料
定　員：20名　要申込

◆台焼つくり
日にち：11月17日(日)
内　容：台焼窯元の杉村峰秀氏を講師に迎え、台焼つくりを体験します。
材料費：1,500円
定　員：15名　要申込

◆花巻人形絵付け体験
日にち：令和７年３月23日(日)
内　容：平賀工芸社の平賀恵美子氏を講師に迎え、花巻人形の絵付けを体験します。
材料費：1,600円～
定　員：20名　要申込

◆塗り絵掛軸つくり
日にち：５月４日(土・祝)
内　容：当館所蔵資料の塗り絵をして、掛軸風に仕上げます。
材料費：700円
定　員：20名　要申込

◆鍛冶丁焼つくり
日にち：10月20日(日)
内　容：鍛冶丁焼窯元の阿部太成氏を講師に迎え、鍛冶丁焼つくりを体験します。
材料費：1,500円
定　員：15名　要申込

◆ミニチュア土器つくり
日にち：12月８日(日)
内　容：オーブンで焼ける陶土で小さな縄文土器を作ります。
材料費：250円
定　員：20名　要申込

※講座・ワークショップの場所は博物館講座体験学習室、時間は13時30分～15時までを予定しています。
※お申し込みは開催日の１ケ月前からです。
※講座・ワークショップともに内容に変更がある場合があります。あらかじめご了承ください。

令和６年度花巻市博物館テーマ展

「多田等観 ―遥かなるチベット―」

令和6年5月25日－7月7日

多田等観（ただとうかん）は秋田市出身の世界的なチベット学者です。ダライ・ラマ13世と師弟関係を結び、10年にも及ぶ現地での修行生活の末、チベット仏教に関する膨大な資料を日本にもたらしました。

チベットより請来した数々の秘仏や世界的にも貴重な仏画などは、平成６年（1994）に花巻市へ寄贈され、以降、花巻市博物館の展示資料の目玉として大いに注目を集めてきました。

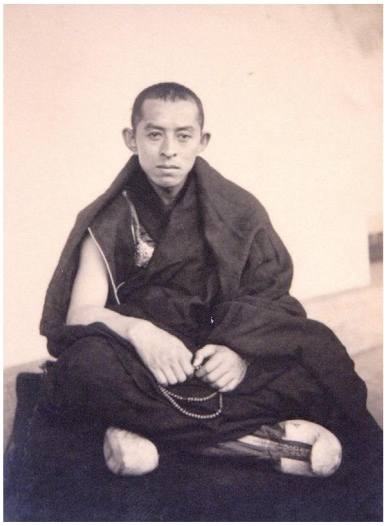
本展では花巻市博物館開館20周年を記念して、当館で所蔵するチベット仏教に関する貴重な資料を一挙公開します。また、戦中、チベット請来資料の疎開から始まった花巻との交流についても紹介し、改めて多田等観の功績を顕彰します。

1 チベットへ

等観は、明治23年（1890）秋田市の浄土真宗本願寺派弘誓山西船寺（ぐせいさんさいせんじ）の三男として生まれます。秋田中学校（現・県立秋田高等学校）を卒業し、西本願寺でのアルバイトを終えた等観は、浄土真宗本願寺派宗主大谷光瑞（そうしゅおおたにこうずい）（1876－1948）より、ダライ・ラマ13世（1876－1933）が派遣した３人のチベット人留学生の世話役が命じられました。等観は約１年間チベット僧と寝食を共にし、チベット語を会得します。しかし、明治45年（1912）辛亥革命が勃発。帰還の命が下った留学生に付き添い、インドへと渡ることになります。そこでダライ・ラマ13世に謁見を許された等観は、「トゥプテェン・ゲンツェン」というチベット名を与えられ、チベットでの修行を提案されます。大谷光瑞の入蔵命令書を受け、チベット入りを決心した等観は、ブータン人に変装した上で単身ヒマラヤを越えて、チベットの都ラサに向かいます。

2 等観が見たチベット

大正２年（1913）９月ラサに着いた等観はダライ・ラマ13世より、寺院に入り修行をしながらチベット仏教を学ぶよう命じられます。当時5,500人ほどの僧侶が所属していた大僧院、セラ僧院に籍を置くことになった等観は、学僧として過ごす傍ら、チベット大蔵経をはじめとした仏教関係の典籍の収集につとめました。チベットでの生活の中で、ダライ・ラマ13世とは師弟関係以上の強い絆を結びます。



僧侶姿の多田等観

ダライ・ラマ13世の強い援助も得ながら、約10年間にも及ぶ修行を終え、外国人で初めて最高学位であるゲシェー（大僧正）の資格が許されました。

3 美しきチベットの仏

大正12年（1923）、等観は約24,000部にも及ぶ膨大な経典や、美しい仏画・仏像を携えて日本へと帰国しました。これらの荷物は80頭もの馬に積んで贈られたと言います。

チベットで造られる仏像の多くが金剛仏で、等観が日本へ招来した仏像も、金や宝石で美しく彩られています。なかでも、等観が帰国の際にパンチェン・ラマ（ダライ・ラマに次ぐ高位の僧）より下賜された文殊菩薩坐像は、右手に剣の乗った蓮華を持ち、左手に知恵を象徴する般若経典が乗った

文殊菩薩坐像

蓮華を持ち、細やかな金細工と宝冠や腕のトルコ石の装飾が美しい仏像です。

当館が所蔵するチベット仏教に関するコレクションの中でも、一際目を引くのが全24幅にも及ぶ『釈迦牟尼仏世尊絵伝』です。これは、釈迦の生涯にまつわるエピソードを描いたもので、チベットのポタラ宮殿壁画の原画と伝わっています。一般的には９幅セットが普及していますが、このような大規模なセットは世界的にもほとんど類がありません。

釈迦牟尼仏世尊絵伝　本尊

4　チベット仏教研究の金字塔

日本に帰国した等観は、東京帝国大学文学部嘱託としてチベット文献の整理に着手します。等観が請来した膨大な量の仏典の整理とその目録の作製は、盛岡・願教寺の島地大等の助言によるものでした。

大正14年（1925）には、東北帝国大学講師に招かれ、講義の傍らチベット大蔵経デルゲ版総目録を編纂し、昭和９年（1934）10月『西蔵大蔵経目録』を発行します。これは、チベット大蔵経総目録として世界で初めて刊行されたもので、世界のチベット学界、仏教学界に多大な影響を与えました。

また、蔵外（チベット大蔵経以外の文献）といわれるチベット仏教関係の典籍約4,000点の内容を明らかにした『西蔵撰述仏典目録』を昭和28年（1953）に発行します。この研究の成果が認められ、その年の日本学士院賞を受賞しました。

その後、サンフランシスコのアジア文化研究所や財団法人東洋文庫のチベット学研究センターなどを歴任し、昭和41年（1966）には日本におけるチベット学の繁栄の基礎を築き、後進の育成にも力を注いだことが認められ、勲三等旭日中授章が授与されました。

5　花巻での日々

昭和20年（1945）、等観はチベットから持ち帰った資料を戦禍から守るため、実弟が住職をしていた花巻の光徳寺に疎開させます。しかし、光徳寺も空襲の被害に遭う可能性が高いということで、湯口村（現・花巻市湯口）に居住していた光徳寺の檀家の蔵に分散させて、資料を守りました。それが縁となり、等観は度々花巻を訪れ、地元の人々をはじめ、高村光太郎や宮沢賢治の父 政次郎らと交流をして過ごしました。

昭和22年（1947）には、湯口村の円万寺観音山に等観が花巻に来た際に滞在するための「一燈庵」が建てられました。等観は円万寺観音堂の本尊としてダライ・ラマ13世から下賜された千手千眼十一面観音立像を納めたり、長い間失われていた梵鐘の鋳造について助言や援助をしたりと、観音山の整備に積極的に協力しています。

本展では一燈庵で使っていたものや、花巻の人々に贈った書などを通して、等観が花巻で過ごした日々を紹介します。

円万寺観音堂前にて（中央が多田等観）

◆関連イベント

・学芸員講座
「多田等観と『釈迦牟尼仏世尊絵伝』」
日　時：６月９日(日)13:30～15:00
場　所：花巻市博物館　講座体験学習室
定　員：20名（聴講無料、要予約）

・ギャラリートーク
日　時：６月１日(土)、７月７日(日)
各13:30～14:30
場　所：花巻市博物館　企画展示室
※申込みは不要ですが、入館料が必要です。

活動レポート 令和５年度 市内小中学校利用状況報告

令和元年度末から令和４年度まで続いたコロナ禍がほぼ収束し、日常の生活が戻りつつある今年度でした。博物館利用についても、今年度はコロナ禍以前の状況に戻ってきているようで、市内の多くの小中学校に花巻市博物館を利用していただきました。その利用状況についてお知らせします。

1　市内小中学校の花巻市博物館見学利用状況

小学校		中学校
学年	見学内容等	
６年生	・円万寺遺跡と熊堂古墳群（学習シート使用） ・参勤交代と花巻城の関わり ・かがくいひろしの世界展	利用なし
６年生	・縄文～近代までの花巻の歴史（学習シート使用） ・かがくいひろしの世界展	
６年生	・近世～近代の花巻の歴史及び美術工芸（学習シート使用） ・かがくいひろしの世界展	

学芸員による花巻城の解説

学習シートを使用して学習

市内３校の６年生が博物館を見学しました。学芸員の解説を受け、学習シートを使いながら歴史を真剣に学び、その後は「かがくいひろしの世界展」を楽しく見学しました。

2　出前授業の実施プログラムとその利用校数

プログラム名	小学校利用校数	中学校利用校数
大迫の神楽の歴史	３年生　１校	０校
縄文時代の暮らし	６年生　１校	０校
戦争と花巻空襲	６年生　２校	全校　２校 ３年生　１校 １年生　１校
多田等観	６年生　１校	０校
八重畑の歴史	5･6年生　1校	０校
昔の道具と暮らし	３年生　13校	０校

全校生徒による戦争資料の観察

学芸員による花巻空襲の解説

出前授業は、のべ23校で実施しました。「大迫の神楽の歴史」は、館長講話の形で実施しました。「八重畑の歴史」は、学校からの要望（記念事業に向けての学習のため）により、新たにプログラムを作成して実施しました。

3　中学生の職場体験

職場体験の利用申し込みが４校からあり、計12人を受け入れました。管理的業務として「受付」を、専門的業務として「収蔵資料の写真撮影」や「演示具作り」などを体験してもらい、さらに最終日には学芸員の指導で古文書の解読も体験してもらいました。

受付業務

古文書の解読体験

火起こし体験

4　市内小中学校の学年ＰＴＡ行事での体験学習利用

学年ＰＴＡ行事での体験学習利用が小学校で１校ありました（常設展示見学＋弓矢・火起こし体験）。保護者代表の方々の指示がよく、安全に楽しく活動していました。

館長コラム　干支神社巡り

今年は辰年。新春のテレビ「世界ふしぎ発見」を見ていたら、干支神社巡りなる企画をやっていた。こういうことには乗りやすい性格のため、早速遠野市小友町にある巌龍神社に出かけた。ここは、国道107号線から旧小友の宿場町の方に向かってすぐの場所にあり、国道沿いにある産直からも見ることができる。神社の背後にある巨大な不動岩の中央には、縦にうねったように岩石の貫入があり、これが天に昇る龍のようにみえる。それだけではなく、この地が二河川の合流点にあることも神社の成り立ちに関係しているのであろう。

やはり、龍と水は切っても切り離せない。花巻市内でも湯口の宝龍大権現、湯本の法龍大権現など「龍」の字がつく神社があるが、これらも水の恵に感謝して建立されたものである。

水の神様といわれる瀬織津姫も龍神と深く関係しているとされる。ただ、瀬織津姫は記紀には登場しない神様であり、神道の祭祀などで唱えられる大祓詞（おおはらえのことば）にのみ登場する。大祓詞では、「早川の瀬に坐す瀬織津比賣と云ふ神」とあり、川の水の神様として、すべての罪を海に流してくれるという。また、伊勢神宮の内宮にも祀られているとされる。内宮の荒祭宮は、正宮に準ずる第一別宮に位し、正宮に祀られている天照大御神の「荒御魂（あらみたま）」といわれているが、伊勢神宮では祭神の名を明らかにしていないことから、この神を瀬織津姫だと唱える人たちがいるのである。

謎の多い瀬織津姫は、全国に「瀬織津姫マニア」がいる。最近では、新海誠監督の大ヒットアニメ「君の名は。」のモデルが、瀬織津姫ではないかと話題になったこともある。

人気のある瀬織津姫であるが、市内でも祭神とする神社は多い。古来から水の恵みをもたらすとされた霊山・早池峰山の祭神も瀬織津姫（瀬織津比売）であり、早池峯神社（大迫）で祀られている。他にも、田中神社（大迫）、金谷神社（湯本）、弘淵神社（石鳥谷）、大澤滝神社（東和）、滝ノ澤神社（東和）などがある。いずれの神社も湧水や滝、川などの近くにあり、水に関する伝説・伝承を伝えている。

今年の御利益を得たい方は、どうぞ干支関連神社巡りをして楽しんで頂きたい。

令和6年4月～7月の行事予定

【企画展示室】

●テーマ展「花博コレクション」
「斎藤宗次郎展」
会　期：～５月６日（月・振）

●テーマ展「多田等観 ―遥かなるチベット―」
会　期：５月25日㈯～７月７日㈰

●特別展
「アニメージュとジブリ展　花巻市博物館展」
会　期：７月20日㈯～９月23日（月・振）

【ワークショップ】

◆Ｐ3のワークショップメニューをご覧ください。

【講　座】

◆館長講座－１「早池峰信仰と嶽妙泉寺」
日　時：６月23日㈰　13:30～15:00
定　員：30名　※要申込
費　用：無料
会　場：花巻市博物館講座体験学習室
※５月23日㈭より受付を開始します。

◆学芸員講座①
「多田等観と『釈迦牟尼仏世尊絵伝』」
日　時：６月９日㈰　13:30～15:00
定　員：30名　※要申込
費　用：無料
会　場：花巻市博物館講座体験学習
※５月９日㈭より受付を開始します。

※ワークショップ、講座ともに詳細につきましては、博物館へお問い合わせください。

花巻市博物館

〒025-0014 岩手県花巻市高松第26地割８番地１
電　　話：0198-32-1030　FAX：0198-32-1050
開館時間：午前８時30分から午後４時30分まで
休 館 日：12月28日から１月１日まで

入館料	小学生・中学生	150（100）円
	高校生・学生	250（200）円
	一般	350（300）円

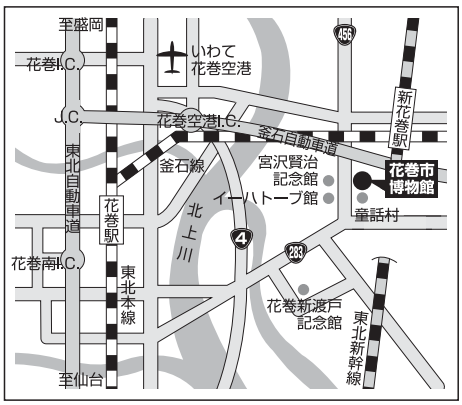
※（　）内は20名以上の団体割引料金です。
※割安な近隣4館共通券もあります。
※特別展示を行う場合、別に入館料を定める場合があります。

交通案内

◆バス
新花巻駅→賢治記念館口
岩手県交通　土沢線　イトーヨーカドー行…約５分
花巻駅→賢治記念館口
岩手県交通　土沢線　土沢駅行…約20分

◆車
花巻空港ＩＣより…約10分

◆徒歩
新花巻駅より…約25分



URL:https://www.city.hanamaki.iwate.jp/bunkasports/bunka/1008981/index.html

HANAHAKU

花博コレクション

COLLECTION

平沢屏山（1822－1876）「蝦夷風俗十二ヶ月屏風　三月、四月」

材質形状／絹本着色、二曲一隻　サイズ／130.0×54.5×3.4cm
印章／「平澤之印」「屏山」「背山臨水」

アイヌ風俗画の代表的な絵師である平沢屏山（本名：平沢国太郎）は、文政５年（1822）大迫町下町の平沢四郎兵衛家の長男として生まれました。23、4歳の時に北海道の箱館（函館）に渡った屏山は、当時の豪商・杉浦嘉七に絵の才能を認められ、嘉七の請負場所であった十勝・日高地方を訪れます。そこでアイヌの人々と暮らしながらアイヌの風俗を熱心に写生しました。

屏山の代表作の一つである「蝦夷風俗十二ヶ月屏風」は、六曲一双屏風の各扇にアイヌの人々の12ヶ月の暮らしを描いた作品です。この屏風はのちに分散保存され、その中の３月、４月部分が当館に所蔵されています。３月（画像右側）には海岸での布海苔採り作業の様子、４月（画像左側）には囲炉裏の鍋を囲む家族団らんの様子が描かれています。登場する人物たちは表情豊かに描写され、生き生きと画面に存在しています。季節は春と言っても、北海道はまだまだ寒さが続く時期。厳しい自然の中でも互いに支え合いながらたくましく生きるアイヌの人々の姿が、屏山の確かな描写力で表現されています。

（学芸調査員　三浦友季）